



No.65 JUNE.2017



【「平城宮跡出土木簡」の国宝指定 答申について】

去る3月10日、国の文化審議会から平城宮跡の木簡を国宝に指定するよう答申が出されました。平城宮跡最初の木簡が見つかったのは、1961年1月のことです。これまで60年近くにおよぶ平城宮跡の発掘調査最大の成果の一つである平城宮跡の木簡が、木簡として初めて国宝となります。

今回、国宝指定の答申が出されたのは次の木簡群です。(A) ①2003年重要文化財指定の平城宮跡大膳職推定地出土木簡39点(SK219・SE311)、②2007年重要文化財指定の平城宮跡内裏北外郭官衙出土木簡1,785点(SK820)、③2010年重要文化財指定の平城宮跡内膳司推定地出土木簡483点(SK870・SK2101・SK2102・SK2107)、④2015年重要文化財指定の平城宮跡造酒司出土木簡568点(SD3035・SE3046・SD3047・SD3050)、(B) 次の5地点出土の未指定文化財計309点。①平城宮跡西南隅の二条大路北側溝SD1250出土木簡(第14次調査、1963年度)7点、②平城宮跡内の下ツ道西側溝SD1900出土木簡(第16・17次調査、1963・64年度)9点、③平城宮跡西南官衙の土坑SK1979出土木簡(第18次、1964年度)16点、④平城宮跡内裏東辺の暗渠SD2000出土木簡(第21次、1964年度)2点、⑤平城宮跡内裏東大溝SD2700出土木簡(第21次、1964年度)275点。

(A)は重要文化財から国宝への格上げ、(B)は新規指定で、最初から国宝です。手続きとしては、(A)の重要文化財を統合し、(B)の①から⑤までの文化財(未指定)を追加して、「平城宮跡出土木簡」として国宝に指定する、というものです。

これにより、第22次調査北区まで出土した木簡は、「平城宮木簡」未掲載のもの(木簡番号をもたないもの)も含めて、全て国宝となります(「平城宮

木簡1」・「同2」所取の木簡のうち、木簡番号1から2550まで)。指定点数が計3,184点で「平城宮木簡」の番号(上記の2550)と合わないのは、「平城宮木簡1」では一文字も読めないものも含めて全てに木簡番号を付けていたのに対し、「平城宮木簡2」以降は読めないものには原則として木簡番号を付けているないという事情によります。

今回の答申の結果、平城宮跡に埋もれている木簡は、将来発掘されて保存処理が済めば、国宝候補になり得る資料ということになりました。特別史跡平城宮跡の学術的価値が、将来の国宝の包蔵地としてさらに高く評価されたともいえるでしょう。その意味で今回の国宝指定答申は、木簡にとってだけでなく、平城宮跡にとってもうれしいニュースとなりました。

(副所長 渡辺晃宏)



「間々司前解」と書き出す下ツ道西側溝出土の新指定の過所(パスポート)木簡



平城宮跡の既指定木簡出土地(黄緑色)と、新指定木簡出土地(水色)(赤色は100点以上の木簡出土遺構)



発掘調査の概要

藤原宮外周帶の調査(飛鳥藤原第191次)

2017年1月から2月まで、水路改修にともなって全長137mもの細長い調査区を設定し、発掘調査を実施しました。調査地は、南面大垣外濠と六条大路の間にある外周帶と呼ばれる空閑地にあたります。

調査区は水路による削平が著しく、残念ながら古代の遺構面が残存しない部分がほとんどでした。かろうじて調査区西部で、古代の東西溝を2条検出しました。2つの溝は重複しており、下層の溝は、幅1m程度の流路と考えられます。埋土からは、藤原宮造営期の土器や藤原宮の瓦が多く出土しました。上層の溝は、南肩を検出し、幅1.2m以上、深さ20cmで、溝は東に向かって北に振れ、調査区中央よりやや西で調査区外となります。上層の溝は、南面大垣外濠と位置が合致することから、外濠か外濠埋め立て後の落ち込み等の可能性も考えられます。

宮造営前の遺構としては、調査区東部で検出した古墳時代の土坑から、吉備型甕と呼ばれる特徴的な甕が出土しました。そのほか、4条検出した自然流路のうち、3条が旧地形に沿って斜行していました。

本調査は、遺構の残存状態は良好ではありませんでしたが、水路の削平を免れた遺構から、藤原宮南辺の様相の一端を知ることができました。また古墳時代以前の旧地形や土地利用を考えるうえでも参考になる成果を得られたと考えています。

(都城発掘調査部 石田由紀子)



調査区西半全景(西から)

山田寺の調査(飛鳥藤原第189~11次)

山田寺は、蘇我倉山田石川麻呂の発願により建立された古代寺院です。7世紀の中頃に造営が始まりますが、石川麻呂の死により一時期造営が中断し、最終的に天武天皇14年(685)に完成にいたったと考えられています。

本調査は、史跡地北端の法面改修工事にともなうもので、北面大垣(寺域北側を囲う塀)の柱穴列の検出が予想されました。調査の結果、想定通りの位置で大垣の柱穴列を3間分検出しました。柱穴は大きな柱を立て並べて高い塀が築かれていたことがうかがえます。また一部の柱穴には、古い柱を抜き取って新しい柱に改修した痕跡もみつかりました。同様の痕跡は以前の調査でも発見されており、天武朝の寺全城の完成にあわせ、古くなった当初の柱を抜いて改修されたものと考えられています。本調査からも、この所見を追認することができました。

また、調査区北側では、予想に反して、瓦を組んで構築した暗渠が4条もみつかりました。暗渠は柱穴を壊して築かれており、大垣が廃絶した後に、寺域内の排水を目的として設置されたようです。これまでの調査では、東面の大垣は10世紀前半に倒壊し、築地塀に改作されたことがあきらかとなっています。今回検出の暗渠も、あるいはこうした塀の改作にともなって設置されたものかもしれません。

今回は21mの限られた範囲の調査でしたが、調査区内に所狭しと遺構が現れ、予想以上の大きな成果が得られました。「飛鳥は何が出てくるかわからない」との声をしばしば耳にしますが、こうした小規模な調査であっても、おそらくできることを改めて実感しました。

(都城発掘調査部 廣瀬覚)



調査区全景(北西から)

平城京右京三条一坊二坪・朱雀大路の調査

(平城第577次)

奈良文化財研究所では、国土交通省が進めている史跡朱雀大路跡の整備にともなう発掘調査を、2015年から続けてきました。今回の調査区は、奈文研ニュースNo.64でも紹介した平城第578次調査区の、南方約150mの位置あたります。平城京右京三条一坊二坪における、朱雀大路西側溝と築地塀の位置や規模を確認することを目的に、発掘をおこないました。調査期間は2016年12月2日から翌年1月31日まで、調査面積は120m²です。

調査の結果、東西の両肩に木の杭列をともなう、幅3.1~3.4m、深さ1.0~1.1mの南北方向の溝を検出しました。この溝が朱雀大路西側溝とみられ、これまでの調査区で確認された西側溝の規模とほぼ同一です。この溝のさらに西側には、幅約1mの平坦な走りをはさんで、きめの細かい土を積んだ築地塀の基礎とみられる土層を、幅4.8~5.0mの範囲で確認しました。さらに、築地塀より西側の坪内についても、南北4.5m×東西5mの範囲を発掘しましたが、顕著な遺構はみつかりませんでした。

また、この溝の中からは、木簡や人形、和同開珎や土器・瓦等の奈良時代の遺物を数多く出土しました。特に、木簡の中には「養老三年(719)」の紀年をもつものがみつかり、この溝の時期を知る手がかりになります。

本調査を通じて、平城宮朱雀門の正面周辺の様相が、一層あきらかになりました。朱雀大路跡の整備にともなう発掘調査は、これで一段落となります。

(都城発掘調査部 庄田 慎矢)



検出した朱雀大路西側溝と朱雀門(南から)

平城京左京一条二坊十坪の調査(平城第583次)

今回の調査は、現在、田園と住宅地が混在した風景が広がる、平城宮の東方、法華寺の北方でおこないました。平城京左京一条二坊十坪の北西隅に位置すると想定されます。奈良文化財研究所では、同坪について、住宅建設等にともなう比較的小規模な発掘調査を積み重ね、当該地の遺跡の解明につとめてきました。

今回の調査区も、39m²とやはりそれほど広くありません。周辺の調査成果から、坪を区画する施設や建物の検出を想定していました。ところが意外にもみつかったのは、真っ黒な整地土の広がりと、真っ黒な埋土をもつ2条の東西溝と長方形平面の土坑でした。

真っ黒な土を掘ってみると、炭化物や坩埚・羽口・鉄滓・銅滓・炉壁片等、冶金に関連した遺物が非常に多く出土しました。いっぽう、遺構面自体が焼けて硬化している様子はありませんでした。おそらく、本調査区は近傍に所在した冶金関連施設の廃棄に関連する一角であったと想定できます。

小規模ながらも、平城宮や法華寺の造営の具体的な姿を示唆する大きな成果を得ることができた調査となりました。引き続き規模の大小に関わらず、十分な注意を払って調査に臨みたいと思います。

(都城発掘調査部 鈴木智大)



真っ黒な埋土をもつ東西溝(中央部、北東から)

「香山」と墨書された土器



(左下の土器の口径は13.4cm)



調査地遠景（1985年）北西から　遠方は香具山

これらの土器に書かれた「香山」とは、香具山のことです。出土したのは、藤原京左京六条三坊の地にあった井戸からで、そこは香具山の西北麓、まさにお膝元にあたる場所です(現在は、奈良文化財研究所 都城発掘調査部(飛鳥藤原地区)の庁舎が建っています)。井戸からは「香山」と墨書きされた土器が全部で9点出土しており、いずれも奈良時代のものです。

では、この文字はどのような目的で書かれたのでしょうか？

「香山」の文字は土器の底部に書かれており、食事の際、土器を使うときにはみえないことから、運搬時や保管時に意味をなすと考えられます。このような土器の底に書かれた文字は、同じ形の土器を逆さまに重ねた一番上に置かれ、供給先を示していたとする意見があります。

このような見解が妥当であるならば、土器が運び込まれた奈良時代の香具山西北麓には、「香山」の名を冠した施設が置かれていた可能性が高いでしょう。

その施設が具体的にどのような役割をもっていたのかについては、発掘調査で確認された奈良時代の遺構が少ないため、確定することはできません。ただし、調査では奈良時代の良好な土器が数百点もみつかっており、平城京に遷都した後も、調査地周辺で多くの人々が仕事をし、食事をとっていたことは確かです。今後の調査により、当地一帯の奈良時代の様相がより詳しくあきらかとなることを期待しています。

(飛鳥資料館 若杉 智宏)

奈良市における庭園の悉皆的調査

遺跡整備研究室では、2012年より奈良市の文化財との連携研究として、奈良市における庭園の悉皆的調査を実施しています。調査の目的は、名勝庭園以外に、奈良市内に残る歴史的な庭園を調査し、その数と現況を把握するとともに、文化財指定・登録等の保護施策のための基礎資料を作成することです。

奈良市に残る庭園の中でも、森蘿(1905-1988)が昭和期に作った庭は特筆に値するでしょう。奈良文化財研究所の発足の1952年より15年勤めた森は、日本庭園史研究の基盤を築いたとして高く評価されていますが、じつは、社寺や民間、公園や宿泊施設等、全国60件数の庭園の作庭家としても活躍していました。

中でも、岩井邸庭園(1970年)は森にとってまったく新しい挑戦でした。それまで唐招提寺や法華寺等、古建築の庭園を設計していましたが、岩井邸では打ち放しコンクリートの住居に作庭を試みたのです。

門から玄関まで湾曲する石畳の横に、約7tの生駒産の巨石を2つ深く埋め、その周りに室生産の栗石と苔を敷くことによって深山幽邃の雰囲気を醸しだしました。家に近づくにつれ、建築にあわせた幾何学的な切り石のデザインへと変わっていきます。いわば、自然と人工の調和を計った構成です。

しかし、庭は生き物であり、管理する職人によって、また施主が世代交代することによって大きく変化したり、消滅したりすることも少なくありません。岩井邸庭園も例外ではなく、90歳を超える現所有者が維持管理してきた思いにどのように寄り添い、森の庭園を残していくかという問題に直面しつつあります。このように奈良市内に残っている古代の庭のみならず、近現代の庭の現況を把握・記録した上で評価をしていくことも緊急の課題となっています。

(文化遺産部 エマニュエル・マレス)



岩井邸庭園(2013年撮影)

保存科学研究集会の開催

保存科学研究集会は、文化財の保存にかかわる全国の文化財担当者が、保存科学に関する様々な問題について情報共有と意見交換をする場として毎年開催されています。昨年度は「文化財調査におけるイメージング技術の諸問題」と題して2017年3月に平城宮跡資料館において開催し、計115人の参加がありました。

文化財におけるイメージング技術は、鏡に覆われた遺物の内部を可視化するX線ラジオグラフィや、肉眼では確認できない墨書を可視化する赤外線リフレクトグラフィ等の技術に始まり、近年では化学分析の結果を2次元的に表示するマッピング技術や膨大な点群データを用いて3次元イメージを構成する技術、文化財の内部構造を3次元的に把握するX線CT等の技術が急速に発展しています。これらのイメージング技術が文化財調査において非常に効力を発揮することはもちろんですが、いっぽうで技術の進歩とともに、それらの機器がブラックボックスとなってしまうこともあります。

そこで、今回の研究集会では保存科学や考古学の研究者による最新の調査の実例だけではなく、機器の開発に携わっておられる技術者の方にも講演いただき、イメージング技術の原理について解説いただくとともに、現行の機器でできること、そして現行機器の限界、問題点についてもご報告いただきました。講演後の総合討議では、計測された画像データの保管と共有化等、その管理と運用方法について新たな問題提起もなされ、学会等が主導してその指針を示すこと等が求められました。

なお、保存科学研究集会で報告された6件の研究報告の概要は、「埋蔵文化財ニュース167号」にてご覧いただけますので、是非ご参照ください。

(埋蔵文化財センター 柳田 明進)



保存科学研究集会の様子

■ 全国遺跡報告総覧の国際発信

全国遺跡報告総覧は、海外からみると日本全国の発掘調査報告書を体系的に活用するため、唯一無二のデータベースといえます。この点から、より一層の国際発信をはかるために、2017年2月24日と27日に、英国のセインズベリー日本藝術研究所とヨーク大学考古学情報サービスにて、考古学情報の国際発信に関するセミナーを開催しました。セミナーは、全国遺跡報告総覧の紹介と発展の可能性を議論の軸にし、考古学情報の国際発信において先行している先方機関との相互の協力関係を探る観点で進めました。セインズベリー日本藝術研究所では、様々なデータベース作成や、普及事業への貢献、大学教育での活用等様々な連携事業を議論しました。また日本考古学を研究している学生の多くは、英語による検索に非常に大きな関心を示していました。普遍的な価値をもつ日本考古学の生データへの需要は非常に強いことを確認しました。

ヨーク大学考古学情報サービスは、英国の発掘調査の情報を集積し公開しています。またEU全体の考古学情報の連携にも大きな役割を果たしています。セミナーでは、考古学情報を国際的に共有し連携するための具体的な方法について本格的に議論しました。また全国遺跡報告総覧の年間ダウンロード件数が、運用からわずか1年半ですでにEU全体の考古学情報統合システムの20倍以上に達し、世界的にみても突出した利用実績である点も大きな驚きを与えたようです。ヨーロッパを中心に、世界の考古学情報の連携が進んでいますが、全国遺跡報告総覧を今後、世界の考古学情報と連携させる大変に強く要望されました。全国遺跡報告総覧は、国内の行政、学界のみならず、世界の考古学界全体にとっても、不可欠な存在となり得ることを改めて認識しました。

(都城発掘調査部 国武 貞克)



ヨーク大学考古学情報サービス所長ジュリアン・リチャード教授(中央右)とともに

■ 奈文研新オリジナルグッズが誕生!

昨年度に製作・販売して好評のオリジナルグッズをご紹介します。これらの製作にあたっては、飛鳥の歴史や文化に親しみを感じてもらい、手に取った人の新たな視点や気づきのきっかけになるようなグッズに仕上げました。

グッズには、奈良文化財研究所の独自性を出せるものとして、軒丸瓦、土器の実測図、古墳壁画をモチーフに使用しました。「瓦でぬぐい」は、瓦の研究員とともにデザインをおこない、それぞれの瓦の特徴を再現しました。「土器でぬぐい」は、発掘調査の報告書のページをイメージして製作しました。実測図の線の緻密さや、美しく配置された土器には、研究員のこだわりが反映されています。報告書や土器の実測図そのものは、一般の人にとって馴染みがないかもしれません、それゆえのおもしろさもあり、土器の研究を知るきっかけになればと思い、デザインに採用しました。

「高松塚古墳スカート柄ブックカバー」は、高松塚古墳の西壁に描かれた女子群像のスカートをアレンジしました。実際の壁画には塗り忘れの部分があるので、そこは白いままで再現しています。「キトラ古墳天文図柄ブックカバー」は、手に取った人が、古代の人が見た星空に思いを馳せてもらえるよう、実物のキトラ古墳の天井に描かれた壁画をもとに夜空をイメージして色を加工しました。

今回のグッズはSNSでも大きな反響があり、新聞各紙にも取り上げていただきました。このような取組を続けることで、文化財がより身近な存在となり、実物を見に足を運んでいただけたら嬉しいです。

(飛鳥資料館 小沼 美結)



今回製作したグッズ

飛鳥資料館 夏期企画展 第8回写真コンテスト「飛鳥の路」

あなたの心にうかぶ、飛鳥の路の魅力はなんですか？

飛鳥時代、都に往還する人々が歩いた山田路や下つ道などの大道。持統天皇が吉野へ行幸した芋峠越えの街道。長い歴史をもつ路が、飛鳥にはあります。

今も飛鳥には、日々、人々が歩む路があります。古い集落をぬける路。田畠の畦道。寺社の参道。路傍にたたずむ石仏や季節の花々が、懐かしい景色をいろいろとります。

古代から現代まで、あまたの人々が行き交い、歴史を重ねてきた飛鳥の路。

第8回の写真コンテストでは、「飛鳥の路」をテーマに、飛鳥地域の歴史や文化、人々の営みを感じる「路」を撮影した写真を募集します。飛鳥の路の魅力を写真で表現してください。

(飛鳥資料館 西田 紀子)



応募締切：7月2日(日)必着

写真展示期間：7月28日(金)～9月3日(日)

来館者投票期間：7月28日(金)～8月20日(日)

お問合せ・応募先：〒634-0102 奈良県高市郡明日香村奥山601 飞鳥資料館 写真コンテスト係 (☎0744-54-3561)

ホームページ：<https://www.nabunken.go.jp/asuka/>

平城宮跡資料館 夏のこども展示「ナント！ すてきな！？ 平城生活♪」

今年も、あっという間に夏のこども展示の時期にならきました。

今年の展示は、「ナント！ すてきな！？ 平城生活♪」です。ここでは、まずは、平城京にくらした人々—みやこびとのーの生活のありさまを紹介します。その上で、「平城京24時間」、「平城カレンダー」、「ゆりかごから墓場まで」等の展示で、みやこびとの一日、一年、一生といったライフサイクルをお示ししたいと思います。はたして、1300年前の奈良時代のみやこびとの平城生活は、どのようなものだったのでしょうか？ 私たち現代人の生活とつながるものもあるのでしょうか？乞うご期待。

会期中には、こどももおとなも楽しめるギャラリートークも開催予定です。ぜひ、ご家族でご一緒に越しください。

(企画調整部 加藤 真二)

会 期：7月22日(土)～9月3日(日)月曜休館

開館時間：9:00～16:30(入館は16:00まで)

ギャラリートーク：7月28日、8月4日、18日、25日(いずれも金曜日)各回14:30～(予定)

ホームページ：<https://www.nabunken.go.jp/heijo/museum/> お問合せ：☎0742-30-6753(連携推進課)



■ お知らせ

「奈良の都の木簡に会いに行こう！」(日本学術振興会 ひらめき★ときめきサイエンスプログラム)

みなさんは木簡(もっかん)を見たことがありますか？平城宮跡で、夏休みの1日を木簡とともに過ごしてみませんか？詳しく述べるホームページ(<https://www.nabunken.go.jp/fukyu/event2017.html>)をご覧ください。

日 時：8月22日(火)・23日(水) 9:30～17:00(同一プログラムで2回おこないます)

募集人数：各日とも10人(締切7月28日)。応募多数の場合は抽選になります)

対 象：小学5・6年生、中学生(保護者同伴可)

申 込：TEL(0742-30-6753)または、日本学術振興会のホームページ(<https://www.jsp.s.go.jp/hirameki/index.html>)からお申し込みください。

■ 記録

文化財担当者研修(専門研修)

○建築遺構調査課程

2017年6月12日～6月16日

7名

平城宮跡資料館春期企画展

2月4日(土)～4月2日(日)

「発掘速報展 平城2016」

12,658名

平城宮跡資料館春期企画展

4月29日(土)～5月31日

「永野太造作品展—草創期の奈文研を支えた

写真家一」

21,811名

現地説明会

○平城第584次発掘調査 現地説明会

平城宮跡東院地区

2017年5月21日(日)

519名

第120回公開講演会

2017年6月17日(土)

195名

編集「奈文研ニュース」編集委員会

発行 奈良文化財研究所 <https://www.nabunken.go.jp>

Eメール jimiu@nabunken.go.jp

発行年月 2017年6月